

幕のいろいろ

今年^今は、相撲中継が中止になるなど、相撲に関連したニュースが多い1年だった。11月は1年を締めくくる大相撲「九州場所」が行われる。相撲のことばにあるいろいろな「幕」について考えてみたい。

相撲には「幕内」ということばがある。「前頭以上の力士」のことで、「幕の内」とも書き、「まくうち」または「まくのうち」と読む。どの表記も、どの読み方も日本語としては間違いではないが、NHKの「大相撲中継」では、「幕内」と書いて「まくのうち」と読むように統一している。

「幕内(幕の内)」は歌舞伎のことばとしても使われる。芝居では舞台と客席を幕でへだてることから、「幕の内側」つまり「楽屋」や「裏方(大道具や衣装, 床山, 囃子方)」などを表す語として使われる。最近では、これを「楽屋裏」「楽屋」または単純に「裏方」と言う場合が多く、実際には、芝居でこのことばが使われることは少なくなっている。また、「幕の内」となると「幕の内弁当」が思い浮かぶ。江戸時代、芝居小屋で飲食する場合には芝居茶屋が出す弁当を食べるようになっていた。こうした弁当を「幕間」と呼ばれる休憩時間に食べていたことから、「幕がしまっている間に食べる弁当」という意味で「幕の内弁当」と言うようになった。握り飯、こんにゃく、焼き豆腐、芋、かまぼこ、たま

ご焼きなどが入ったものが定番だったようだ。

相撲の「幕内(幕の内)」の語源は何だろうか。『日本国語大辞典』(小学館)によれば、「江戸時代、将軍の相撲上覧の際に、幕の内部に伺候し、円座御免の待遇を受けた、最もすぐれた数人の力士」を「幕の内」と言うようになったという。古い時代、遊山や行楽などの時、まわりに幕を張り、その中で宴を催した。将軍が相撲を見る時にも、周りから見えないように幕を張った。その幕の内側に入れる「選ばれた」力士という意味の「幕の内」である。相撲で「幕」を使った語は、「幕内」以外に、「幕下」「平幕」「幕尻」などがある。十両より下で三段目よりも上の階級を「幕下二段目」と言い、これを略して「幕下」と言う。また、三役(小結、関脇、大関)より下の幕内力士を「平幕」、幕内力士の中で最下位の力士を「幕尻」と言う。

同じように「幕」ということばを使う芝居と相撲だが、「幕」の形式や役割が異なる。芝居は左から右に引く「引幕」だが、相撲は「幔幕」である。また、芝居は、客席と舞台を区切る「幕」だが、相撲は、力士の格をわけけるものとして「幕」が使われる。

今年の「幕切れ」の場所で、力士たちがどんな相撲を見せてくれるのか、楽しみだ。

山下洋子(やましたようこ)